

## 祈禱の精神

△祈禱は我らが運用する言語の中尤も高き使用語である。祈禱は言葉に移さるゝものゝ中で、最も高き意義を含んでゐる。實に祈禱は言葉を突破して敢て行爲に進ましむる。

△眞個の宗教とは何であらうか。宗教は神學上の多くの眞理を言葉に表明することではない。又眞實らしき思想を聯ねることでもない。即ち宗教は最も力ある祈禱を以て宗教に達することである。即ち靈魂がしかと神に足溜りを感じて祈禱するところに宗教が存在する。

△祈禱は眞理の中心と高さとを有ち、殊に基督教的意義の眞理に於て實在と行爲とを含蓄する。

△眞正の祈禱は自分自身を欺くことを許さない。祈禱は我々の厭ふべき矜誇の緊張を

除却する。祈禱は明晰に靈的幻象を生ずる。即ち神の家庭に於て始め得べき判断で、神の光に照らされつゝ、我々の靈魂を踏査することに努力するのである。

△祈禱に於て我らは自然の理法に反する事柄をなさうとは神に要求しない。我らはむしろ自然其物の中心にまで躍進してその眞正の結果を掴むのである。何となれば我らが懇望し、要求する神は宇宙間全創造の主宰者にして且つ一切の究局點であるからである。

△眞實の祈禱に於て我等は二つの働らきをなしうる。我らは驚異、愛、讚美の中に自己を滅却すると共に、我等は自己に透徹し得る。即ち我等は神の聖名を祝し、かつ崇むべく我が衷にある全靈を鼓舞し、激勵する。

△祈禱に於て我等は常に要求する所の物を想起のみならず、又我等は益々己に親密な、そして靈的な種類の新しき一物を發見するのである。乃ち我等が靈的に生長すればするほど、益々多く我等は潜在意識若くは無意識の状態より顯はれる。

△我等の多くは恩寵に燃されて祈るのでなく、むしろ必要に迫まれて祈る。かるが故に我等の祈禱は讚美よりも、むしろ絶叫である。約束よりも、むしろ尋問である。勝利たるよりも、より多く戦慄する。努力することよりも、むしろ力を要求する。此に於て我等はキリストとの祈禱の間には大なる差異を存する。

△永遠の子なるキリストの一切の靈能は祈禱に向つて注がれた。祈禱は神の子たるキリストの經驗と行爲とが實現された崇高な表現であつた。無我と勢力との適當な結合はごキリストの生涯に於て顯著なものはない。力に就てのキリストの意識は如何なる物にも普及せるが、しかも決して卑しき自負なるものは存しなかつたのである。

△キリストの祈禱は非常な要求といふ點よりでなく、むしろ絶倫の力の活動であつた。彼の祈禱は高擧の精神から起つたので、毫も失望から來て居らない。彼の祈禱は歡喜多くして義務に驅らるゝことは少なかつた。彼の祈禱は信仰に乏しき人のそれに非ずして神恩の祐かなもののそれであつた。彼の祈禱に於て彼は自分の請願や、便宜

などを告げずして、しかも神意を遂行せんことを捧げた。彼は常に神意を知悉して居たから、神に聽かれたのである。

△我等は苦痛の除去されんことを執拗に祈る。しかし乍ら之れよりも、一層高き祈禱がある。即ち苦痛の除去されんことよりも、其物の轉換されんことを祈ることは更に大なる事柄である。神に向つて之に宣誓することを祈るものは一層の恩寵である。苦痛の『サクラメント』——即ち『聖旨を爲させ給へ』との忍従を以て自己を放棄することは容易な業ならざるも、其は靈魂を神に捧げて神を尊崇する所以たるのである。之れ則ち祈禱の聖化であつて、そして宣誓となる。是れぞ祈禱への轉換となるのである。

△信仰は少なくとも科學のごとく靈魂に對して至要分子であり、かつ信仰はより多く獨立の基礎を有する。そして祈禱は常に信仰に關して必要であるのみならず行爲に於て信仰其物となるのである。

△祈禱は知識の行爲でなくて信仰の活動である。祈禱は打算より起る事件にあらずして確信——即ち我等の信仰は人々の知識に於て成立せざるも、而も神の力に於て一致する所の確信から顯はるゝ。

△ルーテル曰く『祈禱に於ける最善の事は信仰である』と。

△我等は立派な洞察力を有する祈禱よりも多く自己審判の祈禱を要求する。

△祈禱は神と共に會話する技術である。

△我等は祈禱に於て直接に終局の實在に觸るゝ。そして我等は思想の自然的考究によつて之を爲すのでなく、しかも尠なからざる努力の伴ふ要求によつて之をなすのである。

△祈禱は祈禱なる言葉の嚴格な、そして中心的意義に於て默示の雰圍氣となる。祈禱は神の顯現が靈覺に發揚せらるゝ場所である。

△一切の宗教は祈禱の上に建設せられてゐて、そして祈禱の如何によつて其が宗教の

高低が試みられる。宗教的であることは祈ることであり 非宗教的であることは祈ることが適當でないことである。

△宗教の理は眞個に祈禱の哲學であつてそして最も善き神學は縮小されたる祈禱である。即ち眞の神學は熱情を含み、そして祈禱となつて向上し、迸散する。

△神に對する我等實際の觀念の現はるゝことも又神に對する我等實際の關係の示さるゝことも祈禱に存する。

△神に關する尤も大なる、尤も深い、尤も眞實な思想は祈禱によつて創造せらるゝ。此處に正當な思想が正當な意志の中にそが至要の條件を把持する。眞の祈禱の状態と實行とは基督教的實體と極致とを含蓄する。恩寵に生長するといふことは祈禱によつて多を理解するものとなることである。

△祈禱は我等の全人格に肉薄する、管にそれのみに止まらず、實に神に接近せしむる。そして他の何處にもない眞の家庭となる所の神に接近しうるのである。

△我等は單なる瞑想に於て神に相對することは出来ぬ。又人生の尤も價値ある資産として神を培ふことも出来ぬ。併しながら神は祈禱に於て我等の愛護者であり、救主であり、仲保者であり、將た眞理及び力である、否我等の靈的世界である。

△祈禱は人の奉仕が訓練となるよりも、神愛について一個の大なる學校で、そして訓練である。併し乍ら之から切り絶つことは出来ないのである。

△祈禱は靈魂の習慣的食欲で、そして又習慣的食物である。神に依りて生長しつゝある兒童は常に餓ゆる。祈禱はそれが純潔に於て、それが活ける行爲に於て信仰の生活である。食ふこと及び語ることに共に生活には必要なるも、而も兩者は生活でない。

△各人の生活は見えない者の力によつて牽かれて居る。もし君が神に向つて祈りつゝあるでなければ、何か他の方に向つて居るのだ。君はエルサレムか若くはバビロンか孰れかに君の顔の向ひて居る方に祈りつゝある。希求する所ある生活の眞の自愛主義は祈禱である。

△もし戦争が或意味に於て罪惡に對する神の審判であるとするなら、そしてもし罪惡が基督と神との審判によりて滅亡さるるであらうとするなら、今日我らは一の新しき深さと意義とを以て『世の罪を負ふ神の羔よ、我らに爾の平和を賜はれ。爾の十字架に於て總ての歴史的事件に關して最後の審判を降せよ』と祈りたい。

(セ・ノール・チャ・プレーヤーより抄譯)

大正十二年七月二十八日印刷  
大正十二年七月三十一日發行

(定價貳圓)

著者 倉長 巍

發行者 福永文之助  
東京市京橋區尾張町二丁目十五番地

印刷人 望月清矣  
東京市京橋區南金六町十二番地

印刷所 英文通信社印刷所  
東京市京橋區南金六町十二番地

東京市京橋區尾張町二丁目十五番地

發行所 警醒社書店

振替東京 五五三番  
電話銀座 一五八七番  
一六九九番

不許複製

中川景輝編	柏井全集 第一、第二	定價各二圓五十錢 送料各十錢
武本喜代藏著	信仰に生きて	定價一圓八十錢 送料十錢
三並良著	生命中心の哲學	定價八圓九十錢
下村孝太郎著	靈魂不滅觀	定價十二圓八十錢
賀川豐彥著	生命宗教と生命藝術	定價十二圓八十錢
内村鑑三著	宗教と現世	定價十二圓五十錢
松村介石著	魂の改造	定價十二圓
佐藤繁彥著	一粒の麥	定價一圓三十錢
郷司健爾著	靈交の生活	定價七圓四十錢

發行所 東京 警醒社書店 振替 五三番 東京

504  
222

終